

枯辺日向

「ところで、こいしには世界がどんな風に見えるの」

寺の一室でお茶を飲む私へと村紗水蜜が投げかけた問いは、きつと、風の吹き始めるタイミングと同じように、不意に生まれたのだ。まるで、何処へしまったか忘れた耳かきの在り処を訊ねるような、何の気なしの表情で投げられた疑問だったと思う。

その時、私はお茶を啜ろうと湯呑を傾けかけていて、そのまま返答に窮してしまった。彼女との世界の見え方の差異なんて比較しようもないし、特徴を述べ列ねようにも、彼女の求める答えがわからないし。

「えっと。何て言うのかな。こいしって、誰にも気付かれない存在になれるじゃない。それって、どんな気分なのかなーって」

繕う様に付け足す彼女を見て、家での出来事をふと思ひ出す。

姉の買い込んだ大量の甘納豆を、好きでもないものにもそもそと食べていると、お隣が牛乳寒天と取り換えてくれたことがあった。それは、さほど遠くない過去。お隣は気の利く良い子だ、とだけその時は思っていたけれど「こいし様は近頃よく、考えていることが表情に出ますよね」だなんて言っていたのが、ようやく心に引つ掛かって、どうにも気恥ずかしくてたまらなくなってきた。その感情を、眉と一緒に人差し指で揉みほぐしてやった。湯呑の温度のかけらが心地好かったけれど、それを噛み締める間もなく、かけらは散り散りになった。

世界の見え方

今現在の正直な気持ちを述べると「そんなもの知るか」の一言にしか行き着かない。言葉だけで主観を齟齬なく共有させるのは、簡単なことではないし、そもそも、言葉で世界観を表現する機会もなければ、その気になろうとすることさえなかったのだもの。

気ままに、のらりくらりと生きているだけ。それは楽しいとも言えるし、寂しいとも無情とも言い表せるけれど、どれもきつと、瞬間的な感情の一部でしかなくって。だから多分、それらは回答として適切ではないのだと思う。

私の胸元、紫紺の瞳をぼんやりと眺めていた彼女は、私の視線に氣付いて瞳を向け直した。

「ひよつとして、まずいこと訊いちやったかなあ」

そういうことではないのだけれど。

真剣に答えを求めていることなんて、わかりきっている。けれども明確な答えを返せないのも気持ちが悪いし、だからと言ってこのまま答えあぐねる訳にもいかなかった。

言葉を探しているうちに「ま、いいのよ。ただの気紛れだしさ」と村紗は背を向けようとした。その手を、咄嗟に握ってしまった。

しばし見つめ合う。きよとんと丸くなった瞳、半開きの口、その掌は、されるがまま。直視するにはあまりにも恥ずかしくて、近すぎた。

「……………どしたの」

そんなもの、知るか。ただの衝動だもの。

俯いても、彼女は覗き込もうと身を低くする。ああ、きつと私の顔は耳まで真っ赤に違いない。このまま消えてしまいたい。そうとまで